



**Lili'uokalani — Queen of Hawai'i**  
**1917-2017**

ハワイは、1843年にイギリスとフランスが同国を独立国として承認したことにより、初の非ヨーロッパ系自然国家として国際社会の仲間入りを果たします。続いてデンマーク(1946年)、米国(1849年)、スウェーデンおよびノルウェー(1852年)、ベルギーおよびオランダ(1862年)、スペイン(1863年)、スイス連合(1864年)、ロシア(1869年)、日本(1871年)、オーストリアーハンガリー(1875年)、および統一後のドイツ(1879年)が、同様にハワイ王国を独立国家として承認します。

承認当初のハワイ王国は、ヨーロッパの王国の中でも特に島国の王国だったイギリス(イングラ  
ンド)と、密接な連携を築きます。ハワイ王国は、アメリカ合衆国の思惑に対しては常に懐疑的  
でした。というのも、南北戦争後も奴隷市場における黒人への非人道的で不当な扱いが続いて  
いることを知っていましたし、当時まだ法的に人権を認められず牛のように使い捨てる扱いを  
受けていた「インディアン」達への迫害を目にしてしてきたためです。ハワイの先住民は肌が  
色黒であるため、もしアメリカの思惑通りに占領されてしまえば、奴隷として扱われ、二等市  
民とみなされて人権を失う可能性があるのではないかと危惧されたのです。

米国での南北戦争以降、アメリカやヨーロッパの強力な実業家たちは、ハワイ君主制の弱体化  
と企業利益の保護を目的として、秘密裏に武装民兵を編成し始めます。1875年には、米国と当  
時のハワイ王国との間で互恵条約が承認され、ハワイ産砂糖の米国への免税輸出が始まったこ  
とにより、アメリカ人実業家に多大な利益がもたらされ、砂糖産業の急激な拡大が進みます。  
実業家たちは、その利権をさらに保護するため、1887年ハワイ王国憲法をカラカウア王に強要  
します。武装民兵の武力を盾に、憲法への署名に応じなければ武力に訴え、近臣も含めて危害  
を加える、と王を脅して署名を迫ったことから、それはのちに銃剣憲法として知られるよう  
になります。決して批准されることのないこの「憲法」は、あたかもイギリスの立憲君主国  
を創造するかのように見せかけていました。しかしこの憲法は、君主制の権威をはく奪し、ア  
メリカ人やヨーロッパ人及びハワイ先住民のエリートによって操られた政府の立法府や内閣に  
権力を与えるものだったのです。これにより、ハワイ産砂糖の免税輸入を継続すること引き  
換えに、米国に真珠湾の排他的な使用権を与える新条約を議会で通過させることが可能となり  
ました。ただし1890年には、真珠湾を統制していた米国が、ハワイの砂糖産業を援護すること  
となった先の条約に基づく競争優位性を排除する新しい立法を可決しました。

1887年の銃剣憲法下では、不動産の価値に基づいて投票資格を与えるという新たな条件を規定  
し、すでに投票権にも変更を加え始めていました。ハワイ先住民に加えて、王国のもて帰化  
し、人口の大部分を占めていた日本人や中国人など多くのアジア系住民も、投票権をはく奪さ  
れることとなります。これによって、ハワイの市民権を必要とするまでもなく完全な投票権を  
手に入れることができた裕福なアメリカ人やヨーロッパ人など、お金持ち財界貴族による投票  
権の独占が保障されました。1893年までには、ハワイ先住民や公民権を奪われた帰化市民ら  
の支持を得た女王リリウオカラニ(Lili'uokalani)が、新しい憲法を導入して、これらの不公平を  
是正するよう試みます。

1893年1月17日、経済的および政治的な権力を失うことを恐れた サンフォード・ドール と  
、その仲間の地元実業家からなる委員会は、アメリカ海軍の助けを得てハワイ王国を制圧・崩  
壊させ、ハワイ暫定政権の設立を宣言して、当地がアメリカ合衆国に併合されるまでのあい  
だ統治を行いました。王国崩壊への道すじは、少なくとも1887年の銃剣憲法設立当初から計画  
されていたと考えられ、1820年代からハワイ全土に出現していたプロテスタント宣教師教会の  
従属を得て実現します。女王の支持者のうち何人かは、建前上の「無血革命」の結果殺害され  
、その他は投獄されました。

さらなる流血を避けたいと願った女王は、米国政府に対し王国崩壊を抗議し、自らの復権と正  
義の勝利を期待します。「私ことリリウオカラニは、神の恵みとハワイ王国憲法のもと女王と  
して君臨するものである。私はここに、私をはじめハワイ王国立憲政府に反旗を翻し、暫定政  
府の確立を主張する一部の人物が行う一切の行為に対して、厳粛に抗議する。米国の全権公使  
ジョン・L・スティープンス閣下が、米国の軍隊をホノルルへ上陸させて暫定政権を支持すると宣  
言したことにより、私はアメリカ合衆国の優勢に屈したのである。これ以上の武力衝突やそれ

に伴う犠牲を避けるため、私は今こそ、悔いながらもかかる武力のもとに権力を譲歩する。但し、いずれ米国政府が提示された事実に基づき、同国の代表によるこの行為を取消し、ハワイ諸島における憲法上の統治者として私の立場を復権させるまでのあいだの譲歩とする。」

これを受けて、ドールとその共謀者は、すぐさまワシントンでアメリカ合衆国へのハワイ併合を要請するロビー活動を実施します。一方でハワイ王国のメンバーは、復権に向けたロビー活動を展開しました。当時の民主党系 グロバー・クリーブランド米大統領は、王国の崩壊が違法の戦争行為であると判断しました。そこで島嶼併合の検討を拒否し、まず女王の王位復権に取り組みます。すると、王国を打ち倒し **ハワイ共和国**の建国を宣言した実業家エリート達は、そのほとんどが共和党员であったことから、クリーブランド大統領の二期目が終了し、新たに共和党系の大統領が誕生するのを待って、再び併合案を打ち出すことにします。1895年1月5日、ハワイ先住民で構成する自由の戦士が反革命を掲げて発起しますが、白人実業家エリート率いる優勢な武力にかなわず、数人が射殺されて失敗に終わります。リリウオカラニ女王は、反逆罪で逮捕され、王宮で永久的に幽閉の身となり、ついに退位を余儀なくされてしまいました。このクーデターが失敗に終わったのち、米国はハワイ侵略を実行に移します。ハワイには傀儡政権が設置され、米国に島々を「割譲」することになったのです。

1887年3月4日に共和党のウィリアム・マッキンリーが大統領に就任すると、以後30年以上に渡る共和党政権による統治が始まりました。マッキンリー率いる共和党は、「明白なる運命（マニフェスト・デステニー）」（帝国主義的な拡大を正当化し必要善として擁護する政策）を主張し、軍事戦略的・経済的観点から強くハワイ併合を支持するとともに、クリーブランド大統領が取り組んできたハワイ王国の復権に向けた活動を弱体化させてしまいます。マッキンリーの要求に応じて署名したハワイ併合の新条約が、承認を得るため議会へと送られました。それに応じて、ハワイ愛国同盟とその女性部が議会へ反対の嘆願を行います。その年の9月と10月に、ファイアロハアイナ（Hui Aloha 'Āina）が、ハワイ住民の過半数を上回るハワイ先住民21,269人から、合計556ページにわたる併合反対の署名を集めました。ファイカライアイナ（Hui Kalai'āina）は、さらに王政復古を求める17,000人の署名を集めます。彼らは米国上院へ嘆願書を提出したのち、上院議員へのロビー活動を展開し、これは、1778年に白人と彼の病気に接触した後、60万～70万人の元の推定人口から間引かれた後、まだ生存している大人のハワイ人の大半を占めています。

1897年にはマッキンリーの併合条約の無効化に成功します。しかし米国議会は1898年に、ニューランズ決議をもって不法にハワイ王国の併合を断行し、ハワイをアメリカ・スペイン戦争開戦中の太平洋における軍事拠点とみなしたほか、太平洋上における将来的な領土拡大をめざして展開の足掛かりとします。リリウオカラニ女王は、ハワイ政府（とその住民）への補償もなく米国が島々を併合したことについて、窃盗の域に達すると指摘し、強硬に反対します。

このように早急かつ強制的なハワイ諸島の米国併合は、大部分が非白人系で構成される居住地を領土に帰することを目的に適用された大がかりな制度の一部にすぎなかったのです。ハワイ王国の経済的および政治的な即時の支配のために、ネイティブのハワイの文化は鎮圧され、母国語のハワイ語の教えは学校で禁じられていました。

# 米国正式謝罪文書

(US Public Law 103-150)

1993年には、民主党のビル・クリントン大統領並びに米国議会が、米国市民を代表し、ハワイ先住民に対して「ハワイ王国の転覆とハワイ先住民の自決権はく奪」について謝罪しました。しかし、共和党主導の連邦議会からの反対にあったことが主な理由となり、これ以降の認知と補償については達成することができませんでした。



リリウオカラニ女王は、1838年9月2日にホノルルで生まれました。彼女の兄であるカラカウア王の王位を1891年1月20日に継承しました。しかし、ハワイ王国はアメリカ軍の脅威によって1893年1月17日に事実上取り潰されました。彼女は1917年11月11日に死を迎えるまで蟄居の身ながら女王であり続けました。